第四講　1981 年 1 月 28 日の講義
ミシェル・フーコー講義集成〈10〉『主体性と真理』

K 原

アフロディシアの倫理的知覚（pp.87-）
「アルテミドロスのテクスト」（夢判断の書、２世紀に書かれる。ある程度ストア派に影響を受ける）
アルテミドロスのテクストの特徴：「アフロディシア」
アフロディシアとは、ギリシア的、ギリシア＝ローマ的、ヘレニズム的、ローマ的な経験を経験づける倫理的知覚と呼びうるものをギリシア人が呼ぶ時の語。
アルテミドロスいわく、性的な内容の夢は「アフロディシアと呼びうる、そうしたものに関わりのある結合や交合に関係している」＝アフロディシアのギリシア的経験に固有の倫理的知覚
アフロディシアのギリシア的経験、肉のキリスト教的経験、セクシュアリテの近代的経験の３つを区別して、アフロディシアを定義する。
→これら３つの経験は、自己の自己に対する関係の３つの様相である。

【アフロディシアのギリシア的経験】by アルテミドロス

- アルテミドロスの関心：性的な内容の夢を出発点として、いかにしてその予見的価値を決定できるのか？ということ＝その夢が好ましいのか好ましくないのかを知ることなので、夢に出てきたその行為が直接的に道徳的にどうということは問題ではない。
- 悪、不幸、不運に類する諸要素、諸特徴を明らかにするときに、好ましいあるいは好ましくない価値を示す諸要素や諸特徴を出現させること。この現れた性行為の本性自体において、夢にみられた性行為の根本的な構成要素において、何が性行為をそこで示された否定的な価値に結びつけるのか？
  →アルテミドロスのテクストから、性的な諸行為の評価システムの形成が明らかにできる。性行為を分析するとき、彼がそれらを分解するやり方により現れるのは、性行為に内在的なものとしての社会的演劇性と呼びうるものである。

＊アルテミドロスのこのテクストは２世紀に書かれ、ある程度ストア派の影響を受けており、本に集められた伝統全体の流れと、口頭による伝承のなかで、それに基づき＋哲学的に再考された伝統全体のなかで作られている。

- 性行為の相手は社会的な人物である。だから、性行為に関してなされる判断は、それに関係する諸個人の社会的属性と不可分である。
  →問題は、これらの性行為は何において社会的属性と不可分であるかを知ることである。
- 性行為が肯定的な価値を持つのは、それがその交錯、交流、シュンプロカイにおいて、関係する諸個人を社会的領域全体において結びつけているのと同じ関係のモデルを、延長ないしは再生産している限りにおいてである。性的交錯において機能している関係の価値は、社会全体における二人の個人のあいだの関係の価値から演繹されるか定義される。
  →この性的関係と社会的関係の間に連続性がある・同型性がある場合には行為はむしろ良いものとして考えられる。

- 性行為がそれが属している社会的諸関係を転倒・転覆・混乱させたり、離れたり逸脱したり（略）している場合は道徳的に誉められたものではないということになる。
  →真の問題は、ホモセクシュアルかヘテロセクシュアルかということではなく、社会的－性的同型性と異型性の分割の問題である。

社会的－性的同型性の原理と能動性の原理（pp.92-4）
アフロディシアの倫理的近くにおいて、興味深く分析できる事例…（同型性の根本的原理）
例）ある成人男性（裕福・権力持ち）とある少年との関係
性的関係：彼　→　消費　→　少年
社会的関係：彼　→ 贈り物　→ 少年　※贈り物とは、配慮、注意、贈り物、用心等の総体をさす。
- この関係は、ギリシアの都市においてあらゆる成人男性がより若い者たちに対して持たなければならない社会的関係と同型である。　→良いもの

例）ある成人男性（裕福・権力持ち）と奴隷との関係
性的関係：奴隷　＞＞＞優位＞＞＞＞　彼（奴隷に対して受動的、主人としての社会的立場にない）
その結果としての社会的関係：彼　＞＞＞優位＞＞＞＞奴隷　という社会的関係を求める
- この関係は異型的になる。　→悪いもの

結婚の価値づけと姦通の定義
結婚と夫婦間の性的関係が、同型の関係の型そのものになっている。
夫婦の性的関係：男　→　消費　→　女
夫婦の社会的関係：男　＞＞＞優位＞＞＞＞ 女
- この関係は、結婚のなかに排他的に性的関係を位置付けるという原理を構築するものでは絶対にない。
- この変化（性的関係は結婚の内部においてのみまったく合法であり受け入れられるというこの原理）は、アルテミドロスと同時代の哲学、のちにはキリスト教において発展していく根本的なもの

- ギリシア（アルテミドロス）時代は、結婚とは性行為を評価するメカニズムの根本的諸原則のひとつであるこの同型性の最も完璧な形式にすぎない。そのため、完璧な形式としての結婚から、完全な異型性に至るまでの同型性の他の形式のグラデーションが見られることになる。
- この時代に妻との性的関係が価値あるものとされるのは、それが唯一のものだからではなく、たんに能う限り最良のものだからである。

- 法的定義において、姦通とは、夫婦のどちらかがもう一方を欺くという事実によって定義されるのではなく、男性が他人の妻を奪う、あるいは既婚の女性が自分の夫以外の男性と性的関係を持つという事実により定義される。
  →法的定義においては、どこから法的過誤が生じるのか正確にされる。
- 同時に、道徳的過誤も存在している。道徳的に「悪い」とみなされるのは、社会において妥当とされる社会的諸関係の型と矛盾しているからである。

セクシュアリテの近代的経験。セクシュアリテの位置決定と性の分割

我々にとって馴染みのある倫理的知覚における根本的な諸要素：

1）位置決定の問題

（われわれになじみのある倫理的知覚においては）「合法的な性的関係は結婚のなかに、そして結婚のなかにのみ位置づけられねばならない」（p.95）

2）生物学的、解剖学的－生理学的な性の区別

（われわれになじみのある倫理的知覚においては）結果として、差異化の重要な基準としての結婚により、性行為の許容される位置と禁止される位置のあいだの対立、その区別の重要な基準としての結婚、同性愛と異性愛のあいだの区別が存在する。

アルテミドロスが証言する、倫理的知覚における根本的原理：

1）位置決定ではなく、同型性のヒエラルキー（＝階層化）の問題

同性愛と異性愛のあいだの分割ではなく、同型性と異型性のグラデーションと、いくつかの行為を絶対的に非難されるべきものとする異型性の境界

- アフロディシアのギリシア的枠組みは、性行為の価値づけは法律の形式にはまったく従っていない。法律の形式とは、完成、充足の原理であり、最も完璧であると考えられる形式（＝結婚）を頂点とした階層化の原理である。
- ギリシア的枠組みは、法律の形式ではなく、ノモスに従っている？このノモスは分類の形式であり、許容されたものと禁止されたものの分割である法律としてではない。

自然的かつ非合理的な活動としての挿入（pp.96-）

アルテミドロスが証言する、倫理的知覚における根本的原理：

2）能動性の原理

アルテミドロスは、性交を社会的領域（ノモスにかなうものかどうか）だけではなく、自然性の領域にも関係づけている。

- アルテミドロスにとっての自然性の本質は挿入である。しかし、アルテミドロスにとって二校関係として、挿入するものとされる者のあいだの関係としては性交の自然性は思考されていない。また、能動的な個人と受動的であろう他者とのあいだの関係としても思考されていない。
- アルテミドロスの「夢判断の書」は、能動的な個人の視点によって完全に支配されている。自然性の側では、性交は本質的に一人の活動であり、主体自体の活動である。

  →それでは、性行為の相手はどう位置づければよいのか？
- 性交相手（挿入の客体）の３つのカテゴリー：女性、少年、奴隷　みんな挿入活動の自然な客体である。（少女は？）なぜなら弱くて美しいからで、何らかの他者によって教育される必要があるから。自然性は主体の活動によって定義される。性行為の自然性は、能動性と受動性の結合ではない。自然性とは能動性である。（＝能動的に挿入する側こそが自然性の上では主体であるということになる）

  →女性、少年、奴隷は、挿入という活動の客体あるいは相関物としては自然性に属するが、主体自

身としてではない（＝不安定な位置にある）が、たんに快楽の主体として参与している（ビミョーだけど)。快楽とは経験の主体であり、快楽を感じる瞬間から主体が現れかけると、それは問題含みの諸要素になる。

- 受動性の快楽を認めてしまえば、正当なただ一人の主体が能動性の主体であるとしているはずのアフロディシアの領域に彼ら彼女らを導き入れてしまう。

女々しい好色家のパラドックス（？）

- そのため、ギリシアの倫理全体として、女性の快楽は定義不可能で、統御不可能なものである、主体が掌握できないものであると考え、女性を反自然的な自然性へ必然的に押し込める。
- 女性の快楽は自然に過剰であり、その快楽は自然と反自然との[つなぎ目]に位置する（少年はまた違うらしい)。

アルテミドロスが証言する、倫理的知覚における根本的原理：pp.102-

３）男性は、性的活動において節度をわきまえなければならない（？）

- あらゆる活動に課されているのと同じ道徳的規則、倫理的規則が課されうるしそうでなければならない
- 能動性を専権的に他者に対してふるう男は、絶対的でありうる活動の主体として、この能動性を制限する原理として、彼が自分自身に対してふるわねばならない主権を見出すことになる？
- 「女性に特徴的な」、生来危険なまでに際限のない快楽に対して、能動的な主体は自ら節度の規則を示さねばならない？
- もしも男性がそのまま節度をわきまえず快楽に引きずられていったら、「もちろん彼は女々しく[弱々しく]なっていく」。(p.103)
  →快楽は、主体から主権を失わせる主要な原動力として機能してしまうことになる。快楽に引きずられ、女性や少年を追いかける者になると、彼自身は受動的になる・自身が受動的であることを好む。これは、節度ある活動の原理ではなく、たんに女性のように快楽の無制限の原理がその行動の原動力であるということになる。

〈フーコーのまとめ〉

- 性行為のアフロディシアの倫理的知覚を組織している枠組みは、主体の非関係的な活動を含む。その活動は非関係的でありながら、社会的諸関係の総体のなかで行使されている。それが節度があり、統御されているためには、その活動はそれらの関係に対して可能な限り同型的に調整され、そうあり続けなければならない。
  →「社会的諸関係と同型的な非関係的活動」ここに倫理的知覚の核心と矛盾がある。
- 性行為のコード化を行おうとした文化は非常に少なく、キリスト教はそれを完全とはほど遠いやり方で試みた。ただ、フーコーはある性行為を前にして「それはむしろ良いことです」とか「それはむしろ悪いことです」とか言うことができる形成的メカニズムがどのようなものかは示せると思うとのこと。

少年との関係の問題化（pp.105-6）

- 結婚は全く問題を提起しないが、一方で男性－少年との関係が問題になる。ギリシア人がたくさんこれについて言及しているのは、それが認められていたからであり、しかしその一方で、たんに容認されていたわけではなく、結婚のようなものではなく、それが問題を提起していたから。
- 男性－少年の関係は、性的活動の相関物として、少年は女性と同じ位置にある（＝客体でしかない）ということが問題となっていた。少年は主体ではないし、主体でありえない。しかし、少年には女性や奴隷と異なる何かがある。それは、少年は将来的に主体になるということ。
- 道徳的に妥当な男性－少年関係をもてるのは、①同型性の原理により、それが社会的諸関係と同型的であるときのみである。たんに剥き出しの性的関係が存在するだけではなく、教育、例示、助力、支援等の社会的関係があり、その関係が同型性の原理に呼応している必要がある。それが妥当になるのは、②能動性の原理により、主体である者が実際に主体でなければならないときである（＝年長の男性が能動的であれば問題ない）。

非性愛化された教育的恋愛術（pp.106-9）

- やがて主体となる少年をどう扱えばよいのか？
  →教育的な諸関係にあてはめる。年長者が、年少者が社会的主体になることを助ける行為の総体に属する。彼を主体へと変容させようとする。このような、女性については見出されない緊張関係（＝教育的関係の核心に、少年が主体ではない性的活動が当然のように存在すること）が存在している。
- ここには矛盾が存在している。ギリシア人たちは、極端な場合はそれを受け入れなかった。この組織化と倫理的知覚という２つの大きな原理のあいだの作用の内部において、これらの原理が両立不可能であり、二つの異なる目的に向かってしまうため。
- この矛盾を受け入れられるようにして、この二つを存続させるための手直しが必要になる。それは、同型性でも能動性でもない別の要素、エロス的なものの要素を出現させる必要性である。
- エロスとは、他者を主体となりつつあるものとして考慮に入れるようになる感情、態度、あり方である。主体となるものへの考慮によって、両方が共存し、協働しうる。エロスは非常に明確な諸々の義務の集成であり、自らを導く技法あるいはむしろ他者を導きつつ自らを導く複雑な技法を含んでいるものである。
- ギリシア文化において、若い少年は快楽を感じてはならない・大人の、年長の者の快楽は非常に厳しい義務の連続によって制限されねばならない。極端な場合は、エロスは年長者が年少者に対するあらゆる性的活動を断念することも含められ、そのため、同性愛とは性的活動の断念の原理が作り上げられる場所だった。
  →<u>大人が少年に受け渡す真理が、少年を少しずつ主体（認識の主体）にしていく</u>

男性－少年の関係において今後考えるべき諸要素

- 自己についての真正のテクノロジー＝個人が主体の地位へと接近することが必要
  （他者との関係における自己のテクノロジー、他者を主体の地位へ近づけるための方法）
- 真を語る義務
  （教育的関係において他者へ伝える真理）

この自己のテクノロジーや真を語る義務が他者へではなく自己へと向かう、自己の中に真理を発見する義務になるような自己統治の技法とアフロディシアが結び付けられたとき、ひとはアフロディシアとは完全に異なる体制のなかにいる…（すでにアルテミドロスのテクストと古代哲学においてこれが準備されていた、完全にキリスト教だけのせいにはできない、ということを今後示していくとのこと）